

---

# なみた屋

うわの空

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

なみだ屋

### 【コード】

N6811U

### 【作者名】

うわの空

### 【あらすじ】

「あなたが死んだら、私が泣きます。それが、なみだ屋です」

自殺しようと思う。

方法は何でもいいんだ。身体がぐちゃぐちゃになってもかまわない。確実に死ねたら、それでいい。死体が見苦しくなったとしても、私自身がそれを見るわけじゃないし。

私が死ねば、両親もホツとするだろう。…いや、悲しむかな？ 八つ当たりの道具がなくなつて。私は左腕の大きな痣をさすりながら、笑つた。はずだった。

「…なんで泣いちゃうかなあ」

最高にみじめだ。自分のために泣くなんて。だけど、私のために泣いてくれる人なんて、他には誰もいないじゃないか。私は私のために、声をあげて泣いた。誰もいない、冷たい校舎の屋上で。

「どうしたんです？」

…誰もいない、屋上で？

目をこすりながら声の方に目をやると、見知らぬおじさんが立っていた。さっきまで誰もいなかったはずなのに、いつの間に？

それに、ここは私の通つてる中学校の屋上だ。だけどこのおじさんは明らかに、教師でも用務員さんでもなかった。だとしたらこの人は一体、誰なんだろう。

きちつとした背広を着こなしているそのおじさんは、にこやかに私の方へ近づいてきた。

「…辛いことがあったのですか？」

うるさい、と思った。生きてることそのものが辛いんだよ馬鹿、とも。

おじさんは私に紺色のハンカチを差し出しながら、足元に目をやった。

「死ぬ気だったのですか……」

おじさんの視線の先を追うと、私が脱ぎ捨てた靴と、汚い字で書かれた遺書があった。授業中に配られたプリントの裏に、黒いボールペンで『疲れた。死ぬ』としか書いていないそれだけど、どう見ても遺書だ。私は慌ててそれを拾い上げ、ぐちゃぐちゃに丸めた。それから内心で、ため息をついた。「死んではいけません！」とか何とか、うるさく説教されるだろうと思ったからだ。

だけどそのおじさんが言ったのは、

「ここから落ちても死ねませんよ」

だった。

「え……？」

「まず、高さが足りない。それから、下が花壇というこの条件の悪さ。ここから落ちても、十中八九、失敗しますよ？なんなら私が、もつといい場所をご紹介しますよ。確実に死ぬる、穴場スポットを」

呆けてる私に、おじさんが素敵な笑顔で言った。

学校に行けばいじめられる。家に帰れば殴られる。私には居場所なんてないんだ。この世にいちゃ、いけない存在なんだ。

どこに行っても、きつと拒絶される。拒絶され続ける。「いつかいいことがあるよ」って人はよく言うけど、いつかっていつ？……私はもう疲れたんだ。今、疲れたの。だから今、死にたい。

なんで死にたいんですか？と訊かれた私は、気付けばボロボロと言葉を零こぼしていた。俯きながら小さい声で語るそれを、おじさんは真剣まことに聞いてくれた。肯定も、否定もせず。

「…それで、死にたいんですか」

「うん。私なんて、死んだ方がいいんだよ。私が死んだらきっと、みんな喜んでくれる。それにきつと、誰も泣かない」

それを聞いたおじさんの眼が、少しだけ鋭くなった。

「本当にそう思ってるんですか？」

「ん？」

「あなたが死んだら、誰も泣かないと」

「…思ってるよ」

私が苦笑すると、おじさんはとびつきりの笑顔を見せた。そして両手を広げ、

「それは、とつても寂しいことだと思いませんか！」

…素晴らしいことだと思いませんか！とでも言っているような、素敵すてきな笑顔と口調だった。

「え、うん、…まあ」

「そうでしょうそうですね！どうです？あなた、私のお客様になりませんか」

「は？」

何言ってるの？という私の声を華麗にスルーして、おじさんは自分の胸に手を当てる。そして、少しだけお辞儀をするようなポーズで、言った。

「私、なみだ屋なんですよ」

「ナミダヤ…？」

聞いたことない職業だ。

「なにそれ」

「簡単に申し上げますと、あなたが死んだ時、私が泣く。そういう職業です」

おじさんはお辞儀のポーズを辞めて、背筋をピンと伸ばして胸を張った。

「たとえ、あなたの葬儀で誰も泣いていなかったとしても、私が泣きます。泣くために、葬儀に参列します。どうです？寂しくないでしょう！！」

「…。」

このおじさんは、本気で言ってるんだろうか。そしてそのナミダは、実在しているんだろうか。開いた口がふさがらないという単語の意味を、私は今、身をもって体験している。

「契約していただけたなら、好きなコースをお選びいただけますよ！『ホロホロと泣く』から『大号泣』まで、バリエーションは様々です！」

「あの…。」

「料金ですか？安心してください。学割、というものがございます！」

「おじさ…。」

「契約していただいた場合、自殺決行前には必ず私にご連絡を…」

おじさんの話が止まらないので、私は大きな声で叫んだ。自分の話を途中でちょん切られたおじさんは、不思議そうな眼で私の顔を見た。

「はい、なんででしょう？」

「おじさん、なんなの？」

「ですから、なみだ屋です」

おじさんは真剣だ。

「…私が死んだら、泣いてくれるって？」

「その通りです」

おじさんは真剣だ。

「…ははは。いいね、それ」

私は笑った。もう笑うしかなかった。このおじさんは何を考えるんだろう。そして、自分も。…奇妙な空間。自分が存在している空間を、ここまで奇妙だと思ったことはない。

奇妙なのはおじさんか、それとも私か。

「私、あんまりお金持ってないけど大丈夫かな？」

「大丈夫です。学割、というものがございます」

おじさんはウインクした。…つもりらしいが、両目ともつぶっている。それはただの瞬きだった。私は笑った。その笑いの意味は、自分でも分からなかった。

「分かった、契約する。私が死んだら、おじさん泣いてね」

「かしこまりました」

おじさんは胸に手を当て、先ほどよりも深い角度でお辞儀をした。それから顔を上げると、こう言った。

「あなたが死んだら私が泣きます。…だから、死なないでください」

この世の終わりみたいに、真っ赤な夕暮れだった。空も、建物も、何もかもが赤く染まっていた。目の前にいる、おじさんの顔も。

「…今、なんて言ったの？」

聞こえていた。聞き取れていたくせに、わざと訊き直した。

「あなたが死んだら私が泣く。だから、死なないでください。…そう言っただんです」

おじさんはほほ笑むと、沈みかかっている夕陽の方を見た。それから、語り始めた。

「自分が死んだら誰か泣くだろうか。…誰もが一度は考えたことのある話でしょう。そして、『家族が、恋人が、あるいは友人が。誰かがきつと泣いてくれるだろう』。そんな風に、答えを出します。」

「けれども私のお客様となる人は、そう考えていない人が多い。自分が死んでも誰も泣かない。むしろ喜ぶ。だから死ぬ。…先ほどのあなたのセリフと似たようなセリフを、私は何度も聞いてきました」

「そこまで言うと、おじさんはふつと息を吐いて笑った。」

「実際、どうなんでしょうね？あなたが死んでも誰も泣かない。本当にそう思いますか」

「…。」

「私はね、あなたのことを詳しくは知らない。ただ、あなたが死んでも誰も泣かないというのは、ないと思っています。たとえあなたの葬儀で誰一人泣かなかったとしても、あなたの知らないどこかで誰かがあなたのために泣いているかもしれない。それに、私も泣きますしね」

「…それは、契約したからでしょ？」

「違います」

「即答、だった。」

「あなたとこうやってお話ししたから。少しでも、あなたのことを知ったから。…あなたのことが、好きになったから。だから、泣くんです」

足元から、子供の笑う声が聞こえた。下を覗くと、男子生徒が2人、笑いながら歩いている。屋上の私たちには、気付いていないようだった。

「もしも今あなたがここから飛び降りたら、あの2人が泣くかもしれない」

同じく男子生徒の様子を見ていたおじさんが、呟く。

「誰かが泣くから、死ぬな。それはおかしい話です。けれども知っておいてほしかった」

「おじさんは」

「…ある男が、首吊り自殺をしました。全てに、疲れていた」

私が言おうとしていることをさえぎって、おじさんは話し始めた。紫から紺色に染まっていく空を仰ぎながら。

「借金まみれで、どうしようもなかったんです。けれどもその男は、誰かに頼るのが酷く苦手でした。…自分が死ねば保険金が入ってくるし、家族は助かる。…きつとみんな、喜ぶ。追い詰められた男はそう思っていました。そして、後悔した」

「…なにが、あつたの？」

私の視界がうつすらとぼやけ始める。その話の意味に、…おじさんの正体に、気付いたから。

「死んだ男は幽霊になりました。そして、自分の葬儀を見に行っただんです。…たくさんの人が、泣いていました。家族も友人も仕事仲間も、皆が後悔していました。『なんでもっと早く気付いてやれなかつたんだろう、助けてやれなかつたんだろう』ってね。…それを見た男は、酷く後悔しました。どうして自分は死を選んでしまったんだろう、って」

「…。」

「自分が死んだら皆が喜ぶ…なんてのは、自分勝手に浅はかな考えです。人のことを考えているようで、考えていない」

おじさんは私の顔を見るとほほ笑み、もう一度ハンカチを貸してくれた。

「あなたが死んだら、私が泣きます。ただ、私の涙は誰にも見えません。あなたにしか、見えません」

おじさんのハンカチは、透けていた。おじさんの、姿も。

「それでも。たとえ姿が見えなくても、あなたが死んだら誰かが悲しむということ覚えていてほしい。後悔してほしく、ないから」  
私のように、と、おじさんは小さな声で付け加えた。

私がボロボロと零した涙は、アスファルトに次々と黒い点を作った。おじさんの流した涙は、アスファルトの色を変えることなく、消えた。

「…私、もう少し頑張ってみるよ」

真っ赤な鼻で笑うと、おじさんもほほ笑んだ。

「…契約の件ですが、料金は後払いです。それに、いつでも解約できます。」

もしも自殺を決行するときには前もって、なみだ屋である私にご連絡ください。…止めに行きますから」

「なにそれ、結局死なせてくれないんじゃない」

私の笑い声が、温かな校舎の屋上に響いた。

その時にはもう、おじさんの姿は見えなくなっていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6811u/>

---

なみだ屋

2011年7月8日03時25分発行